

いの流水俳壇

松尾 満津於 選

「当季雑詠」

片岡 包女

諦めも無我のうちなり風涼し

(評) 作者は八十路半ばの年令であるが、歳にかまけず何事に対しても積極的である。そんな彼女が、ちよつとした不注意で、思い掛けない怪我で入院する羽目になった。句は入院中の作品である。事故の起きてからいろいろ考えても仕方がない、諦めてその先を達観する中で生まれた作品。歳が高令であるだけに実態は大変だったであろうが、句は怪我の状況を如何にもさりげないように見せている。

友草 水月

飼猫の名も短冊に保育園

(評) 保育園児の七夕祭である。短冊に園児の好きな猫の名前が書いてあった。好きなもの、ほしいもの、願いごと等、何んでも書いてみなさいといったとき、咄嗟にでるもののはやはり一番身近なものに限られる。それが飼猫の名前だったのである。如何にも保育園児らしい七夕祭である。

竹崎 光子

残る蚊の一つのために眠られず

(評) 布団店から蚊帳の姿が消えて久しい。もう郷愁の想いの中にしか存在しないが、蚊帳のあった時代の夏の夜は家中の窓を開け放して、部屋いっぱい蚊帳を吊り、家族一同が雑魚寝で暮らした。クラーの生活が普及した今日ではすでに物語でしかないが大勢が出入りする蚊帳の中に入った蚊を追い出すために大奮闘になったむかしを思い出させてくれた身近な、小さくて深刻な葛藤に今昔の想いがする。

間 浩太

野地蔵に硬貨一枚百合の花

(評) 道端の地蔵に硬貨と百合花を供えたという句意、と理解したが、野地蔵「に」という助詞の使い方には多少の曖昧さが残る。原文のままだと既に供えられていたとも考えられることもある。作者自身の行為であるとすれば「に」ではなく「へ」とすればハッキリするのではなからうか、俳句は助詞の一字で意味が異なるから注意が必要である。何れにしろ世知辛い今の世の中に野佛の賽銭硬貨が存在することに、小さな人間の善意を感じるのである。

筒井 眉躬

空梅雨に一喜一憂野良仕事

(評) 仮名文字は空梅雨と他の事象を繋ぐ助詞として「に」を使った一字だけ。他はすべて漢字によつて構成された句である。そして仮名の一字が前後の関係をわかり易くする働きをしている。今年も気象庁が梅雨入りを宣言した後も雨らしい雨も降らず、ダムは底をついて給水制限や作物への水不足で随分悩まされたがこの句はありのままの情景をそのまま捉えて成功している。

森 洋彦

滴りは愛薄明に咲く曼陀羅華

植田 紀子
風鈴は小樽の音色夜のしじま

岡本とも子
梅雨じめり机の向きを替えにけり

川上こよね
ツピーツピーネクタイ姿の四十雀

津田 久美
浜木綿の群生潮風真正面

中屋 桜子
夏のれん読めぬ屋号の骨董屋

川村千図子
老鶯の声の中なる帰郷かな

川村 博子
ばあちゃんの手のしなやかに柏餅

松岡きよ子

湿原の木道のかげ未草

中野 好子
更衣帽子もかえて旅ごころ

大川 節弥
急情なる心の袈や梅雨一日

渡辺万利子
万緑や山重なりて彩深み行く

吉良 芙美
伏屋きて鳴く梟や闇の声

弘瀬うき子
夕間に鈴ふるように河鹿笛

鈴木 公子
通院の治療終えしねむの花

川村 愛
蒸し暑き曇り空へと雨を乞う

森岡 照月
定年を迎えてさびし夏銀河

楠目 哲朗
父の日の座る具合の変わりなし

松尾満津於
初がほや遠慮に溶ける氷菓子

次題「当季雑詠」五句
締切 毎月 15日

投句先

吾北教育事務所

いの町上八川甲20110

☎86712133

今月のごども川柳

なつよる ながればしみて ねがいごと

伊野小 2年 中岡りゅうや

ともだちと けんかをせずに わをつくらう

神谷小 2年 坂本 志織

やまももが 赤くうれたら サルがきた

中追小 4年 安岡 伸也

あさおきて なつをしらせる せみのこえ

伊野小 4年 山崎 隆正

ひまわりは 小さなたいよう 青い空

伊野小 4年 山村 まゆ

おんだんか 地球にわるい やめようよ

伊野小 4年 吉良あすか

手の中に ほたるの光 あたたかい

中追小 5年 中岡 奈々

つゆになり こころにあめが ふつてきた

伊野小 5年 壬生久実子

訂正とお詫び

広報いの8月号の「いの流水俳壇」で、次の誤記がありました。大変ご迷惑をおかけしました。訂正いたしますとともに、深くお詫び申し上げます。

誤

田草取り早も空になる大薬缶

正

田草取り早も空なる大薬缶